

## はじめに

|          |   |
|----------|---|
| 雑誌名      | 鹿児島大学医学雑誌=Medical journal of Kagoshima University                                 |
| 巻        | 47  |
| 号        | Suppl. 1  |
| 別言語のタイトル | Editorial   |
| URL      | <a href="http://hdl.handle.net/10232/18282">http://hdl.handle.net/10232/18282</a> |

# は じ め に

佐 藤 榮 一

鹿児島大学医学部長

## Editorial

Eiichi SATO, M. D.

Dean, Professor of Pathology, Faculty of Medicine, Kagoshima University, Kagoshima

ウィリアム ウイリス先生は鹿児島のいや日本の近代医学教育及び近代医療の開拓者の一人として、私共鹿児島において医学を学び医を実践する者達にとっては決して忘れることは出来ない恩人であり、その御功績については永遠に語り継がれていく必要があります。ウィリス先生は当初英国大使館付き医官として来日され、生麦事件での治療に当たられたりした後、戊辰の役では負傷者に対して敵味方の差別無く新しい治療を施して古来の日本の治療法の過ちを正し、次いで東京大学の前身東京医学校兼大病院の院長を勤められた後、明治政府の方針が英国医学からドイツ医学採用へと切り替わったため、薩摩の地に移られ、英国流の医療の実践を行い、さらに医学校を開いて近代医学の教育にあたられたのであります。先生は医学のみならず英語を習いに来る学生にも西欧人のものの考え方を教え、沢山の弟子を育てることによって、日本の文明開化にも大きく貢献されたのであります。先生は今から100年前の1894年2月15日に病没されました。この100年の節目を記念して、同先生の我が国の医学及び文化への測り知れない御貢献を顕彰し、御遺徳を偲び、感謝の念を捧げる為の事業が鹿児島大学医学部教授会で計画されたのであります。今般その事業のひとつとして、ウィリス先生に関する資料を集め、鹿児島大学医学雑誌特集号として出版し、世の中へ広く周知を計ると共に、資料の保存を計ることがなされた訳であります。その結果この特集号に見られるように沢山の方々から貴重な資料のご紹介や、あるいはお忙しい中での御寄稿を頂き、まことに有難く思っております。しかしながら、とりわけウィリス先生について御研究をなされ、我が国にとって忘れることの出来ない医学の恩人であるという紹介に尽力された元鹿児島大学医学部長佐藤八郎名誉教授が、1993年10月に突然御他界され、この特集号に新たに御寄稿いただけないことは、何とも残念なことであります。その意味におきまして、ここにこの特集号の完成を見、故佐藤八郎先生の御遺志に少しでも報いることが出来る運びとなりましたことは、私共関係者一同胸をなでおろしているところであります。

尚、記念事業の一環としては、1994年4月9日にウィリス先生の御遺徳顕彰記念式典を行ない、講演会を催したほか、去る1994年9月初旬、鹿児島大学医学部有志と鹿児島日英協会幹部さらにウィリス先生の御子孫あるいは同先生のお弟子さんの縁の方々相集い、英国への訪問団を編成しました。そしてウィリス先生の英国での足跡、とくに医学学習の背景を、エジンバラ大学医学部においてその歴史的伝統的重みのうちに感じ取り、ロンドンの日英協会との交流の中で、昔からの友好をさらに深める思いを新たに、さらに北アイルランドのファーマーナ郡エニスキレンに今なお昔のままに残っている先生の終焉の館を訪れ、近くの教会の墓地にある先生の御一家のお墓に対し心からなる感謝の念をもって、花輪と黙祷を捧げたのであります。その際水平におかれたウィリス家の墓碑に、先生の御逝去の日付けが、15. Feb. 1894. となっていたことを確認いたしましたのであります。

私共は、ウィリス先生なくしては今日の鹿児島地域の医療・医学教育はありえなかったと思っております。幕末から明治初期の日本の夜明けの時代に活躍されたウィリス先生の具体的な内容については、この特集号に詳しく述べられておりますので是非御一読頂きたく存じます。そして願わくば本特集号を通じて、少しでも多くの方々ウィリス先生に関心を寄せられ、さらに改めてウィリアム ウイリス先生の人種をこえた人間愛、学徳、日本の近代の黎明期におけるその偉大な御功績などを偲んで頂ければ、大変幸甚であります。最後にこの特集号の編集のため大変な御尽力を頂いた、本学解剖学第二講座村田長芳教授に深甚なる御礼を申しあげます。

(1995年1月19日記す)